

第2回 講義録

平成 21 年 11 月 6 日（金） 18：30～20：30

川崎区役所 7 階会議室

「娯楽としての映画と映像のまち・かわさきへ」

武重 邦夫（日本映画学校相談役）

■講師経歴

愛知県生まれ。今村昌平監督に師事。1975 年今村監督と横浜放送映画専門学院（現・日本映画学校）を創設。映画監督・プロデューサーとして幅広く活躍。中越大震災で全村が崩壊した山古志村の復興に密着した「1000 年の山古志」をプロデュース。現、日本映画学校相談役。



【前置き】

私は、日本映画学校で映画制作を教えてきましたが、本業は映画のスタッフです。とくに今村昌平監督とは 40 年も一緒にやってきました。今村監督の映画はスタジオできれいに撮る映画ではなく、ほとんど土木作業のようにして作ります。例えば「楢山節考」という映画は山の中に村を作り、みんなで農業や肉體労働をやって作り上げました。今日は“映画と川崎のまち”というテーマですので、私なりに映画のお話をしたいと思います。

1. 映画の歴史

川崎の話をする前に、まず、映画とは何だろうと考えてみましょう。映画と映像はどう違うのだろうかということもありますね。映画の誕生を描いた、NHKの映像がありますので、それを見てお話をします。実写とCGとデジタルを使った5分ほどの短いタイトル部分ですが、その中に、20世紀に世界で起きた事件や、われわれが同時代で生きて見てきたことが全て入っております。これは凄いものです。これを作った人に敬意を払います。つまり、われわれの時代というのは、映像により歴史が記録され保存された最初の世紀でもあるわけです。まず、映像を見てください。

—「映像の20世紀—映画の誕生—タイトル」（NHK） 上映 —

□映画は人間の好奇心を拡大しながら進歩してきた

極論すれば、映画は人間の好奇心で進歩してきた気がします。本日の講演の演題は「娯楽としての映画」ですが、映画はもともと藝術などとは無縁の、見世物小屋からスタートした“際物だった”わけです。当時の見世物は珍しい動物だけでなく、新しい出来事をも大衆に伝えていました。報道機関の役割を果たしてきたのです。面白いのは、アメリカのハリウッド以前の映画は実際の戦争を撮って上映しています。戦争の映像がもの凄く受けるんですね。そのうちに戦争が終わります。すると、今度は自分たちで勝手に戦争を作って商売を始めた。大衆の欲望を満たすためには何でもやった。凄い商魂ですね。それが今日のハリウッドなどの原型になっているのではないかと思います。アメリカでは後に、ベトナム戦争を素材とした「地獄の黙示録」のような芸術映画が誕生するのですが、当初はカリフ

オルニアの草原やメキシコへ行って戦争を再現して、それを撮影してニュースと称して劇場で上映していました。ニュースが娯楽と見世物と一緒にになりながら進んでいったというのが、アメリカの映画の歴史であります。

日露戦争が終わったころですから 1910 から 20 年ころ、フランスでオリエンタルブームがあり、日本を舞台にした映画が流行りました。日本映画だけを作る映画会社がフランスにあったといいます。これには驚きましたね。日露戦争で出征する兵隊と奥さんとの別れや若い軍人の活躍など、そんな作品がフランスで作られたとは夢にも思いませんでした。やはり、浮世絵から始まった印象派の影響でしょうか。日露戦争で大国ロシアに勝利した小国日本の奇跡が、ヨーロッパのジャポニズムに拍車をかけたとも言われています。極東の小さな国だけれども、日本は神秘的で面白いということで素材にされたようです。

1920 年代後半から 30 年代の終わりにかけて映画はトーキー（音付き）に進化します。無声映画に音声が入ってきてはじめて俳優の音が聞こえ、音楽が入ってきました。現在の劇映画の形が完成したわけです。無論、それまでも「カリガリ博士」など芸術的、実験的な有名な無声映画は沢山作られてきました。これは映画が見世物の領域を超えて、文学や演劇の内容に近づこうとする活動であったわけです。映画がまず手本としたのがドイツの演劇でした。ドイツのオペラや演劇は舞台も壮大で光と影の使い方が巧かったのです。ドイツに生まれた映像派の活動は映画を視覚的芸術に進歩させました。

一方、アメリカではヨーロッパでから渡ってきたチャップリンなどが無声喜劇映画を作って創成期のハリウッドで活躍していました。そのうちにトーキーになって、観客は初めて憧れのスターの肉声を聞くことに成ります。美貌だが声の悪い俳優や英語の下手なスターは観客に嫌われ人気を失いました。当時、ハリウッドの大スターだった早川雪舟さんも職を失いました。早川さんは日本人でハリウッドで大スターになった唯一の人です。その後、70 歳でデヴィット・リー監督の「戦場にかかる橋」の名演技でハリウッドで脚光を浴びるのですが、既に 70 歳を越えていました、私は彼が 82 歳のときに沖縄と一緒に撮影をし、助監督として日本語の指導をしました。歴史的な方に会えて本当に嬉しく感激いたしました。

映画は総合芸術だといわれます。映像技術だけでなく、音楽、文学、演劇、舞踊、自然の生態と、あらゆる事象や表現藝術を取り込んだマルチメディアです。今から 20 年ほど前、当時の郵政省や通産省がマルチメディア、マルチメディアと騒いだ事がありました。莫大なお金が映画界でなく、訳の分からない映像分野に投じられた事があります。私たちは、映画こそが完成された本当のマルチメディアだと思っていたので不思議な気持ちでした。多分、お役人達はハードなデジタル技術とソフトなメディアリテラシーを混同していたのでしょう。同じ頃、韓国では莫大な予算を映画界に投入して韓流映画の構築を進めておりました。もし、当時の莫大なマルチメディア予算が日本の映画界に投入されていたらと考えると、残念でなりません。

□日本映画の発達と社会のかかわり

日本では歌舞伎や芝居小屋の興業関係者が映画の発達に関ってきました。歌舞伎には出し物があり、そのまま演じれば映画になります。大正から昭和にかけての映画を見ますと、当時は無声映画の活弁師の全盛時代ですが、多くの役者や俳優が映画会社や制作プロダクションを作っています。片岡千恵蔵や嵐寛寿郎といったスターたちです。彼らは自分たちで会社を作りました。とくに多かったのは関西系です。東京では松竹が蒲田に撮影所を作りました。そうした映画は活動写真と呼ばれ浅草で全盛期を迎え

ます。これらは大正 12 年の大震災で瓦解しますが、大正 11 (1922) 年までの浅草は、ブロードウェイのように発達していました。これは、映画だけではなく、大衆芝居や奇術やオペレッタや漫才の小屋が軒を並べた娯楽の殿堂でした。現在の吉本興業も大阪から上京して、浅草に花月という劇場を持ち活躍していました。“地球の上に朝が来る”の川田晴久は売れっ子で松竹と吉本で奪い合いになりました。興行の世界ではそうしたスターを巡り暴力事件が頻繁に起っていたのです。長谷川一夫は顔を切られましたね。鶴田浩二もそうです。命がけの商売が興業の世界でした。僕らのやっている映画も、世間ではやくざ者の世界のように見られてきました。今でも芸能界はスキャンダラスで、まともな人間が働く場所ではないと思っている人が沢山います。

日本の映画は劇映画から始まりました。浅草のブロードウェイは大正 12 年の関東大震災で滅びるのですが、その少し前に、日暮里を皮切りに、都内に次々と映画館をオープンさせた人物が居ました。本日の主人公である美須鑛(みす・こう)氏です。美須さんは日暮里などで浅草に対抗する劇場を作ろうとしていたんですね。ところが、これがうまくいかなかった。大正 11 年に作り始めた彼の劇場は、不運なことに、翌 12 年の関東大震災ですべて焼けてしまったのです。そこで彼は川崎に移ってくるわけです。そこから美須興行と川崎、あるいは川崎と映画という歴史が始まります。



美須 鑛氏

□川崎市の背景と映画のかかわり

私に言わせると、川崎は日本の富国強兵政策の中で非常に割を食った地域です。つまり、軍需産業を支える京浜工業地帯の拠点として川崎が選ばれたわけですね。ですから、国は重工業の工場群を川崎に作り、文化的インフラは東京や横浜に設けました。

川崎は働く場所で文化とは無縁な場所と位置づけられたのです。酷い話ですが、重工業で働く肉体労働者には酒と女が在れば良い。文化など必要ないというのが当時の為政者の常識だったのです。ま、軍隊と慰安婦の関係と全く同じ認識ですね。それが、東京から美須鑛氏が移ってきた勤労者の街・川崎の実態だったわけです。美須鑛氏は昭和初期の不景気の中でひとつひとつ映画館を作っていくことになります。川崎の初期を語るには、日本鋼管と美須興行は欠かせない重要なファクターだと考えます。この二つが、不思議な需給関係を持ちながら川崎の街を作っていました。これが、川崎の前史だったと思います。

2 美須興行の沿革

□東京大空襲

昭和 11 (1936) 年頃、川崎は軍需産業で栄えて労働者の数が急速に増大しました。当時、17 万人といえますから凄いものです。このときに、美須さんは 6 軒の直営館を作りました。昭和 14 年は私の生まれた年です。その頃に川崎にこれだけの劇場を作るのは、大変なことでした。このまま進んでいけば、美須鑛氏が夢見た浅草ブロードウェイが川崎に実現するはずでした。しかし、2年後には太平洋戦争がはじまり、昭和 18 年頃には空



大勢の人で賑わう現・川崎チネチッタ

襲が始まります。昭和 20 (1945) 年の東京大空襲で川崎もやられて、彼の持っていた劇場も全て焼けてしまいます。

□高度経済成長と日本映画界の興亡

戦後になり日本が復旧する中で、娯楽が映画しかなかったということが、日本映画界に幸いし黄金時代を迎えます。戦争で全てを失った美須さんは、直ちに映画館の再建に取り掛かり大成功しました。七転び八起きの不屈の人生です。映画館は連日満員で、表には長蛇の列が出来る有様でした。やがて昭和 35 年頃から、日本では高度経済成長が始まります。工業都市川崎には日本全国の地域から若い労働者が集まり、人口が増大し美須興行は日本有数の興行会社になりました。しかし、経済成長で日本の社会は急激に変化し始めます。勤労者の賃金が倍増し、競馬や競輪、競艇やパチンコなどのギャンブルが娯楽産業として興隆し、旅行やグルメまで余暇の範囲が広がり始めたのです。そして東京オリンピックを境に、TV がカラー化して日本の全所帯に普及したのです。

高度経済成長でみんなが豊かになったのは確かですが、映画屋にとっては一番悪い時代を迎える事になります。テレビがただで見られるという映像の時代の到来です。日本では映画界が急速に凋落しはじめました。私が学生から社会人になる少し前に、新東宝という映画会社がつぶれ、その後に永田雅一さんの大映が倒産しました。永田さんは作品にお金をかけ、情熱をかけた素晴らしいプロデューサーでした。しかし、時代を読むことが出来ませんでした。70 年代に入ると日活が組合管理におかれ、映画会社はリストラに走り、日本映画は零細な独立プロによって制作されていくようになります。

テレビは世界中を席卷しました。映画王国のハリウッドは、日本より 10 年も早くテレビの攻勢を受けて様々な対抗策を講じて来ました。シネマスコープとって画面を横に長くし立体的に見せようとなりました。シネラマとって縦も大きくしました。画面を大きくして迫力で見せる。テレビでは物理的に不可能なハード面でカバーしようとしたが決め手になりませんでした。やがて、コッポラやスピルバーグが登場し、ハリウッドは作品の内容で勝負するようになっていきます。

□日本興行界の女傑、美須君江氏の活躍

美須鑽氏は戦後の黄金期になるころに身体が悪くなられて、娘の君江さんが美須興行を引き継ぎます。僕は直にお会いしたことはありませんが、映画興行界のゴッドマザーだと聞いておりました。彼女が亡くなられた時に偲ぶ会に伺ったのですが、東映や東宝など映画界大手の社長や会長さんが全員参加されていたのでびっくりしました。偲ぶ会の席で、東映の岡田会長が「東映は君江さんに大変お世話になった。彼女くらい日本映画界に貢献された劇場主はいない」と話してくれました。

日本中から多くの映画館が消えていく中で、君江さんの美須興行は川崎で頑張り抜きました。ですから、東京より

も川崎の方が映画が盛んでした。観客の人口比率が全国で最も多かったと聞いています。昭和 25 (1950) ~27 (1952) 年まで、君江さんはアメリカに行き、ラスベガスを視察して、キャバレーやボウリング場を川崎に開設しました。彼女は映画衰退の現実を鑑みながら、川崎の街に人の集まる場を作ろうとしたのです。日本の場合、キャバレーには酒を飲んで女の子と遊ぶ場所のイメージですが、アメリカではショーが主体で、著名な歌手やエンターテイナーの登竜門になっています。映画館と芝居小屋を運営しな



美須興行のプール

がら、ショーの世界に目をつけた君江さんには先進性を感じます。

川崎には若い労働者のエネルギーが充満しています。歴史的に見れば赤線があったり、競馬場があったり、飲み屋が軒を並べる、“寄せ鍋”のような活気に満ちた街です。こうした街では若者のエネルギーを吸収しようと、新宿の歌舞伎町のお色気やギャンブルの店を開くのが手取り早く儲ける方法です。しかし、君江さんの美須興行は欲望産業に向かわず、キャバレーやボウリング場といった健全な大衆娯楽の“場作り”を志向して行きます。君江さんが採算の悪い映画館を守りながら、何故、大衆娯楽の王道を進もうとしたか？君江さんが亡き今、推察でしかありませんが、彼女の中には父君・美須鑽氏が目指した“浅草ブロードウェイ”の夢が共有されていたのではないのか。私にはそんな風に思えて仕方ありません。



活気あふれる映画街（現・チネチッタ通り）

日本の映画は、1970年代から80年代にかけてダメになります。日本の映画興行者が何をしたかという、地方の劇場をすべて閉じていきました。昭和40年代は高度経済成長の最中、トヨタや日産などにより日本がモータリゼーションを迎える時代です。各産業が銀行から莫大なお金を借りて人材育成に投資しました。儲かるかどうか分らないのに、産業界が一番お金を注ぎ込んだのがこの時代です。ところが、私たちの先輩である日本の映画界は、採算が合わないということで、地方の映画館をなくしていきました。それから、人を採らなくなりました。未来の映画の作り手の助監督の育成もしなくなりました。日本の映画界はリストラを重ね、どんどん衰退していきます。おまけに、地方には映画を見る文化が無くなってしまいました。映画というのは一緒に見て、終わったあとに話し合ったり、自分の人生を重ね合わせてみたりするものなのですが、それが地方になくなった。それが当時の日本の映画界の現状でした。今、私たちはもう一度地方で映画を復活させる運動をしています。

□1980～90年代 シネコン「チネチッタ」の誕生

君江さんの後を引き継いだ三代目が娘の美須孝子さんです。この方は、1987年に老朽化した映画館を日本初のシネマ・コンプレックスにし、名前を「チネチッタ」に変更しました。チネチッタという名前は、イタリア語の造語で“映画の街”を意味し、イタリアの有名な撮影所の名前です。戦後、日本でも大ヒットした「道」とか「鉄道員」という名作はチネチッタ撮影所で作られた作品です。デ・シーカー、ロッセリーニ、フェリーニやヴィスコンティという世界の大監督を輩出した撮影所で



カワサキ ハロウィン

彼女はファッションの世界にいたので、映画館、劇場の枠を外し、若者や家族連れが楽しめる新しい“場づくり”に変えていきました。2002年にはイタリアの街並みをつくり、シネコン、ライブホール、

レストラン、ファッション・ショプと、東京にも無いお洒落な文化ゾーンが川崎に誕生したのです。初代の美須嶺氏の夢は、美須家3代80年の歳月を経て「ラ チッタデッラ」という名の一大エンターテイメント街として実現したのです。とはいえ、文化に関する事業はインフラが出来ても完成するわけではありません。インフラという器や環境が出来ても、そこに息づく魅力的なコンテンツと参集する観客がいて初めて生命を持つものなのです。気まぐれで移りやすい大衆の趣向と変化し続ける時代を見据えながら、3代目孝子氏の挑戦は続いていきます。「ラ チッタデッラ」では13年目を迎えるカワサキ ハロウィンが、10万人の人々が街を埋めつくす川崎文化の象徴になりました。

□川崎における美須興行の功績

美須興行の功績として、映画、大衆芝居、キャバレー、シネコン、ライブホール、アミューズメントセンターと連なる美須興行の流れを見るときに共通するのは、「人が集う場作り」だと思います。これは一見、簡単なように見えますが大違いです。戦後の日本の社会文化状況を見直して見ると、実は、内容的には逆なことをやってきた事が分かります。人が集わないように、非常にパーソナルになってきたんです。たとえばテレビがそうです、団地がそうです、マンションがそうです。かつて首都東京には下町があり、生き活きとした人間の交流がありました。けれど、高度成長期とバブル期の再開発の結果、下町の地縁コミュニティーは分断され消滅しました。都会は人間が孤立して生きる場所になったんです。人間が個々の絆をつなぎ合って社会を創ってきたのが人類の歴史です。孤独死が日常的に報道される社会は異常としか思えません。私が美須興行の歴史を素晴らしいと思うのは、親子3代で「人間が集う」場所作りに専心してきたからです。

強制される事無く、自由にひとが集うのは文化の根源です。世界の歴史を見ても、1930年代のパリはヘミングウェイなどアメリカの作家やスペインのピカソが集まりました。1970年代のニューヨークもそうです。ベトナム戦争の傷痕を乗り越えようと、人々は魅力的な文化を作ってきました。現代では、ベルリンがそうだそうです。壁を壊して貧乏になったけれど、今は文化都市ベルリンを目指し、ヨーロッパ中のアーティストが集まる場所になっているそうです。つまり、人が集まる場づくりを我々はしなくてはいけない。これが現代社会のマイナス部分を埋めていくことなのです。ですから、私は美須家3代の仕事こそ、川崎市で最大の文化貢献だったと評価しています。

3 日本映画学校としんゆり映画祭～川崎北部の映画文化の沿歴～

□映画学校の創設

1975年、私たち今村プロダクションでは横浜に映画学校を作りました。小さな貧乏学校でした。私が34,5歳のときです。今村昌平監督が映画の後継者を作ろうと考えてのスタートでした。この時代は一番受戦争が激しかったころです。青年たちが偏差値の中でぼろぼろになった時期でもありました。しかし、学校を作ると意外に反応が大きく、500人近くの若者が集まりました。私たちは200人くらいの規模を想定していたのですが、たくさん来てしまいました。半分は映画が好きというよりも、



学生を指導する今村昌平監督

何かしないといけない、何かすることはないかと思っている若者たちでした。ラブホテルの窓から学校のネオン看板が見えたので、男と別れてやってきた女の子がいました。競馬場でスポーツ新聞を見て面白そうだから来たとか、一方では早稲田大学の大学院をやめてきた秀才とかいろいろいました。要は、

今村さんの「無人の荒野を突っ走れ！」という檄文に共感して若者たちが集まってきたのです。それだけに、非常に特殊な学校でした。

雑居ビルの中の貧乏学校でしたが、私たちがやろうとしたことは、かつて撮影所で行なわれていた徒弟制度です。いい意味での徒弟制度の教育です。つまり学生に、映画や生き方を手渡しする。単に講義をするのではなく、映画づくりを通じて人間学を渡していくことを目的にしました。今振り返っても、素晴らしい講師陣でした。作家の水上勉さんや藤本義一さんが特別講義をしてくれました。学生には少々難しい講義ですが、一生懸命やってくれました。今は理解できなくても、やがて、大人になり理解すれば良いと思えました。淀川長治さんは当時はテレビで「さよならおじさん」と呼ばれていた方で、私は講師には反対でした。しかし、今村監督が外国映画史を語れるのは、淀長さんしかいないと断言するのでお招きしました。お会いしたら、大変情熱的な方でした。テレビの中で手を振っているのは仮の姿だったのです。或る日、講義を見に行つてびっくりしました。淀川さんが壇上でピョンピョン跳ねているのです。何をしているのかと思ったら、チャップリンの「ライムライト」を自ら演じていたんですね。自殺未遂の踊り子を老芸人のチャップリンが励ます名台詞、「ライブ！ライブ！生きろ、生きるんだ！」という部分です。それを淀川さんが熱演をするわけです。素晴らしい先生だと思えました。



淀川 長治氏

彼は学生たちに、「君たちはどうせお金がないんだから、三食食べるな。二食にきなさい。あと一食分は映画を見なさい。世界中、映画は若者が作ってきた。それが映画の歴史だ。君たちが映画のために一食くらい抜くのは当たり前じゃないか！」と叫びました。淀川さんの言葉に場内はシーン静まり、学生達は涙を流していました。私も若く不遇な映画人だったので、思わず涙ぐみました。淀川さんは情熱家で、素晴らしい人間味ある先生でした。

小沢昭一さんと永六輔さんが、芸能史を担当しました。小沢さんも永さんも、朝1番の授業でしたが40分前には登校されていました。お茶を飲みながらシラバスを査読し、それから劇場教室で講義をします。それは非常にレベルの高い日本の庶民演劇史でした。永さんは授業に遅れてきた学生は、教室へ絶対に入れませんでした。それだけ真剣に授業に取り組まれていました。黛敏郎さんは、題名のない音楽会という番組をテレビ朝日でやっていました。この世界的な大作曲家が映画音楽の授業を担当してくれたのです。

本当に魅力的なハイレベルの授業でしたね。思えば、贅沢な授業が並んでいました。

映画の学校ですから、2学期からは実習が始まります。名作「また逢う日まで」の今井正監督も先生でした。日本映画の巨匠中の巨匠が、何もわからない一年生の実習で指導をしてくださいました。「君の名は」や「帰郷」を作った大庭秀雄監督。この方も素晴らしい先生でした。大島渚監督のお師匠さんです。「独立愚連隊」の岡本喜八監督も実習指導や演出ゼミを担当して下さいました。浦山桐朗さんは、「キューポラのある街」で吉永小百合を見出した監督です。初年度の秋には18人の巨匠が集まり、一つの班で20人の実習指導をしました。現在の日本映画学校では、映画の基礎教育を教えるから実習に入るのですが、当時は何も知らない学生にぶっつけ本番で実習制作をやらせたので大変でした。今考えると、日本映画の歴史に残る快挙だったと思います。

この学校でも最もユニークだったのは、今村さんが農村実習を教科に取り込んだことです。なぜ映画

の学校で農村実習をするのだといった議論もありましたが、今村さんは学生を率いて福島県の須賀川の小さな村で田植えをしました。軟弱な地盤の水田で、女学生が胸まで水につかる有様に、さすがに今村さんも反省して次の年から猪苗代と磐梯町の農村に場所を変えました。この農村実習は新百合ヶ丘移転後も含め30年間続きましたが、日本の農家の変貌が激しく2005年に終了しました。映画学校が終えた頃に、今村さんや私の母校の早稲田大学では農村実習を正規の授業にしました。われわれ映画学校の方が30年早かったねと、今村さんと笑いあったことを覚えています。

この授業の目的は、無償なことを一生懸命やる。ゼロから作り上げる。もう一つは、日本の家族関係を客観的に学ぶ事でした。学生たちが農家に慣れてくると、お嫁さんが学生にグチをこぼすようになるんです。一方で、おばあさんから「うちの嫁がね」などと姑の悩みを聞きかされ、学生は双方に挟まれ辛い体験をする。そういう体験をして家族を知り人間を学んでいく人間学の実習でした。朝5時に起きて、8時に寝ます。でも8時に寝られるかということ、実際は寝られないんですね。農家のおやじさんの酒につき合わされたりたりします。10日間ですが、かけがえのない凄い教育でした。

そうそう演劇科のカリキュラムに漫才を取り入れたことも画期的でした。指導講師には内海好江・佳子さんが来て下さいました。好江師匠は学生達に非常に熱心に教えてくれました。佳子師匠は先輩として横で見守り、適切なアドバイスをする役割り分担でした。好江師匠は若くして亡くなりましたが、佳子師匠が今でも教えています。漫才の授業は、元々漫才師を育成するためではなく、演劇の中に漫才を入れ芸の幅を広げる。日常生活につながった芝居やアクションを教えようと始まった教科でした。後に漫才界のスーパースターになったウッチャンナンチャンもいました。学生のころから巧かったですね。好江師匠が自分の子どものように可愛がり、師匠を慕って漫才の道に進みました。横浜時代の最後のころです。



日本映画学校の前身・横浜放送映画専門学院のあったスカイビル

4 新百合ヶ丘と日本映画学校

□横浜から川崎市の新百合ヶ丘へ

開校から10年目、スカイビルを壊すため学校が横浜から追い払われることになりました。貧乏学校なので行くところがなく困っていたところ、川崎の伊藤市長が小田急電鉄に紹介してくれて、新百合ヶ丘駅前に土地を寄付してもらえました。

とても嬉しかったけれど、当時の新百合ヶ丘には麻生区役所と駅しかなく、周辺は野原でタヌキやキツネが出没する田舎町でした。もう一つ困ったのは、学生や職員が食事をするところがまったく無かったことです。スカイビルは横浜地下街に繋がっており、レストランや食堂がひしめいておりました。ところが、学生達が新百合に移転してきたら、食べる場所がないんですね。そこで彼らが見つけたのは、麻生区役所の食堂です。学生たちは12時5分前に授業を終えて駆け込みます。職員が12時に来ると満員で入れない。ついに麻生区役所の仕事が止まってしまい、学校にクレームが来る始末です。1986年の新百合ヶ丘はそういうところでした。そのころ学校では、ハーバード大学に頼まれて一ヶ月に及ぶスクーリングが始まりました。50名のハーバート生たちも食堂が無いので、学生ホールでパンとチーズを齧っていました。懐かしい思い出です。

□世界の映画学校に躍進

学校は3年制度になり、各種学校から専修学校に変わりました。横浜時代は2年間の教育期間なので、「足腰の強いスタッフ」を育てる事を到達点にしていたのですが、3年制度になると、創作を重点とした「映画作家を育てる」教科に切り替えました。当時私も46歳の働き盛りでしたし、講師陣も若返り意欲的な取り組みが始まりました。その原因のひとつは、ハーバード大学やコロンビア大学のスクーリングで外国の映画学生達に触れた影響だったと思います。新学校では2年間で基礎実習を徹底的に叩き込み、3年では自由に長篇映画を作らせるシステムを採用しました。やってみると出来るものですね。学生達の作品は国際的に高い評価を受け、カンヌやベルリン、モントリオールなどの映画祭に出品できるレベルに達しました。また、今村さんがカンヌで2度もグランプリを受賞した事もあり、世界の映画関係者が来日すると必ず新百合ヶ丘に訪ねてくるようになりました。日本では専門学校と侮られましたが、世界では、イマムラ学校として有名だったのです。

学校は生き物です。時代の変化で学生もどんどん代わってきます。特にバブル時代以降、日本の学生が社会に接する機会が少なくなり、幼児化の傾向にあることが分かってきました。普通の大学ならまだしも、映画の学校では社会体験が無くては脚本も書けません。社会や人間に疎い学生をどう仕込んでいくかが、私たちの大きな課題になりました。この頃には、農村の変貌で映画科の農村実習はなくなり、それに変わる教科に試行錯誤していました。そうした中から生まれたのが「人間研究」というカリキュラムです。

人間研究は文化人類学に似たフィールドワークを主体にした実習授業です。このカリキュラムを可能にするために、1年生の45名クラスを解体して20名のゼミ制を取り入れました。クラス数も教員数も倍になるので学校の運営には辛い制度変更でした。

学生達は入学すると、映画の技術は学ばずに人間研究にかかります。全員が街に出て、自分が興味を抱いた人物を捜し求める事から始まります。各人が見つけてきた人物について、プレゼンテーションを重ねながら2名に絞ってゆきます。次はゼミを2分化して10人編成のチームに分け、16名の指導講師が班別に付き、学生達は取材を深め構成をたて、スライドとパフォーマンスで発表会に臨みます。いわば、フィルムを使わないドキュメンタリーです。ハードで互いに協力し合わないと成立しない授業ですが、この2ヶ月半で学生は見違えるように成長するからふしぎです。

私が世界TV映画教育校連盟に招かれて人間研究のカリキュラムを発表すると、各国の映画学校から高く評価され驚きました。ニューヨーク大学やミュンヘン映画学校の教授たちからは、更に詳しく知りたいと昼食会に招かれました。教授たちからは、イマムラ学校はなぜ世界TV映画教育校連盟に入らないんだ質問されました。わが校は専門学校ですからと答えたら、アメリカでもドイツでも専門学校が参加している。変な遠慮するなといわれ、日本で2校目の認定校になりました。

1学期に人間研究と脚本を終え、2学期から映画技術を教えます。基礎実習が終わると、学生たちが念願の短編映画製作が始まります。ビデオではなくフィルムを使う本格的な映画作りですが、短編なので9分以内という制約があります。8分59秒の中でドラマを作るのは、大変難しいことです。成功の鍵は、8分59秒の中にどのくらいの物語を圧縮して入れられるかですね。まずは、3年前に私のゼミで制作した作品をご覧ください。

— 「雪ぼらけ」(1年武重ゼミ作品)上映 —

この脚本を書いたのは、秋田から来た18歳の青年です。びっくりしたのは、「雪ぼらけ」なんて言葉はないんですね。朝ぼらけとか霧がかかった感じかな、秋田の人が懐かしく感じる雪景色だろうと思ったんですが、それは彼の造語だったのです。驚きましたねえ。脚本の選定には段階が在ります。富士五湖の自衛隊の横に学生が泊まる施設があり、そこで合宿をして全員が脚本を書きます。それから全員でプレゼンテーションをして、この「雪ぼらけ」が選ばれました。われわれ指導講師からすると、これは難しい本です。

東北から川崎のネジ工場へ働きに出てきた青年は孤独です。飲み屋で知り合った同郷の彼女はお見合いで帰ったきり音沙汰なしです。一緒に勤めた友人も帰郷してしまい、青年は次第にノイローゼになって、仕事の最中にネジが頭の中に出てくる幻覚に苦しみます。その揚句に怪我をして部屋の中に閉じこもるが、ヤケ酒を飲んでいるうちに故郷の雪景色の幻想を見ます。「もう駄目だ！田舎へ帰ろう」工場を辞めた青年がバスに乗ろうとしたとき、携帯が鳴り、川崎へ戻ってきた彼女の懐かしい声が聞こえてきます。「工場を辞めるって？あんた職人だろう、男だろう！？」彼女に励まされ、青年は眉を上げて元来た道に戻ってゆきます。9分の短い時間でこれだけのドラマを書くのは至難の業です。



「雪ぼらけ」撮影風景

短編実習ではドラマの基本を教えることが肝心です。このトレーニングをしないと大きな作品はできません。思いつきで撮っているのは到底だめです。短編で腕を磨いて、徐々に大きな作品を作ってゆきます。実習制作は人間を見詰める作業なのです。

「雪ぼらけ」に登場した俳優は、全員が映画科の学生スタッフです。ただ演出するのではなく自分たちも演じて、演ずるとはどういうことかを覚えていく。とてもよい実習です。しかし、映画学校ではシリアスなドラマを作っているばかりではありません。次は珍しい、一コマずつ撮影した立体アニメの作品を観ていただきます。これは楽しい娯楽映画ですが、非常にレベルの高い作品です。

— 「ムービカル」(立体アニメーション)上映 —

これは映画の知識や勉強がないと出来ない作品です。ジョン・ウェインが出てくる、マリリン・モンローが出てくる。ブルースリーが出てきて、最後はロッキーが出てくる。私たちが同時代のスターとして見てきた人物ばかりです。しかし、この作品を作ったのは二十歳前後の若者たちだから驚いてしまいますね。

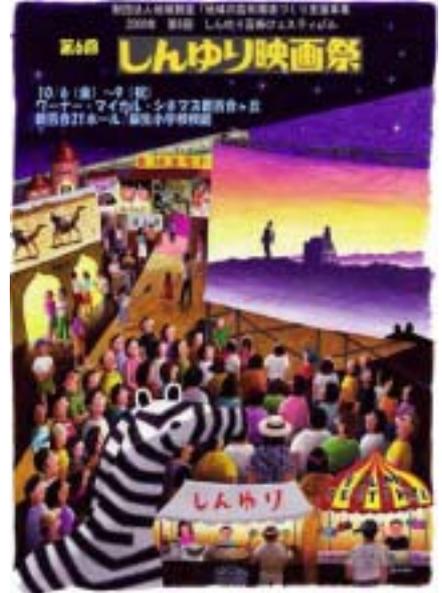
ストーリーの骨格は「ニューシネマ・パラダイス」です。日本の映画館がだめになり、映写係のお爺さんが束の間のまどろみの中で見る夢です。劇場を彩ってきた道具類が出てきて、一斉に踊ったりします。最後の日というタイトルがついています。

どうして皆さんにこの作品を見て頂いたかという、学生達の自由な発想を活かして、しかも完璧な作品を作るように指導しないと、なかなか本物の才能は育ってきません。CGなら簡単にできるが、立体アニメーションは動態を全て粘土の人形で作り、アクションの動作をひとコマひとコマ(24分の1秒)撮影して行くので途方も無い時間と労力がかかります。効率が悪く忍耐と努力がいる作業です。しかし、この作品では効率の悪さが様々な創作の発見に繋がっているのです。遅遅とした作業だからこそ、学生達は映画館の閉鎖と老人の心情をより深く理解することが出来たのです。この発見の喜びが演出家のエネルギーとなり、スタッフのエネルギーになって、この傑作が生まれたのだと私は確信します。

口しんゆり映画祭の誕生

今から15年前の1995年に川崎市から映画祭をやりたいという話があり、新百合ヶ丘で「しんゆり映画祭」が誕生しました。新百合ヶ丘には映画館がありません。仕方が無いので、駅の近くの「しんゆり 21」という多目的ホールを使いました。開催期間はたった3日間、予算は300万でしたがコンパクトで上質な映画祭になりました。第1回のテーマは「家族の肖像」でしたが、今村昌平監督、新藤兼人監督、淀川長治さん、女優の市原悦子さん、脚本家の山田太一さんなど豪華なゲストが揃い大好評でした。新百合ヶ丘で初めての本格的な文化イベントでした。

その翌年から、市民映画祭を作りたいと思い、市民ボランティア20名を募集し、集まった方に映画の作り方を教えました。一流のカメラマンや監督が指導し、市民の方たちが実際に撮影を行いました。今日の「しんゆり映画祭」のスタイルは、そこから始まったといえます。私たち映画学校の関係者は映画作りのプロですが、映画祭は映画を見て楽しむお祭りですから、やはり市民が主体的に創っていくことが本筋だと考えたからです。市民ボランティアが受付から手作りコーヒーの販売まで、何からなにまで、全て自分たちでやり遂げたのが1996年です。当時、「Shall we ダンス？」という映画が流行っていたので周防正行監督をゲストに招きトークをやりました。面白かったのは、トークの途中でボランティアの一人が、「監督、ダンスを指導してくれませんか」と言い出しました。市民の中に社交ダンスを習っているおじさんがいて、舞台上で踊るんですね。周防監督もカチンコを持って演技指導したりして、ユニークな楽しいトークでした。まだ田舎町の映画祭でしたが、中国から「愛恋花火」の監督を呼んだりもしました。



映画祭でまちを彩る・映画祭ポスター

翌97年、新百合ヶ丘にワーナマイカルのシネコンが誕生しました。まちに念願の映画館が出来たので、私は「市民プロデューサー制度」に挑戦しました。市民映画祭と名乗るからには、市民が自ら企画して進めなければ意味がありません。市民が主役になり、行政や我々映画のプロはバックヤードを支える。前年度のボランティアの活躍を見て、私は成功を確信しました。大体、お祭りは住民が主体でやるものです。プロがやれば興行になってしまうのです。

「あなたが実現したいプログラムを企画提出してください」「フィルムを配給会社から借り出す交渉も自分でしてください」「トークをしたければ、監督でも女優さんでも、自分たちでゲストを呼んで下さい」私は市民プロデューサーに向かって、「みなさんが好きなようにやりなさい。どうせ僕が実行委員長なので、全部責任を持ちます。うまく行かなくてもいい、失敗したっていいじゃないか」と申し上げました。人間、失敗を恐れていたなら萎縮して何も出来ません。特に舞台を使うイベントは、のびのびとリラックスしてやるのが成功の秘訣です。とは言え、独りでは責任の重圧に負けてしまうかも知れない。まずはワンプログラムを二人か三人で担当する複数プロデューサー制をとりました。

私の提案に対し、若い主婦のA子さんが直ちに企画を提出しました。彼女は河瀬直美監督の「萌の朱雀」を上映し



周防正行監督を招いてのトークショー

たい。河瀬監督を招いてトークもやりたいと言うのです。「結構、おやりなさい。自分で河瀬さんに出演交渉しなさい」私は若干のアドバイスをし、彼女を励ましました。ところが、凄いんですね。彼女は自ら奈良県まで行って、映画の舞台になった集落を訪ねたのです。その集落で資料を集めたり、出演した村人を取材したりしてきたのです。無論、河瀬監督の出演交渉も彼女のチームが行ない、映画祭の日に臨みました。当日、A子さんと仲間の二人が河瀬監督を迎えてトークをしたのですが、女性の視点からのユニークな質問が面白く大成功でした。終了後に聞くと、ふたりとも足をガタガタ震わせながら話を進めたとのこと、皆で大笑いしました。彼女達の成功が皆の自信になり、市民プロデューサー制度は今日までの12年間続いています。初回に、好奇心が強く行動力のある市民たちに出会えたのが良かったのでしょうかね。

しんゆり映画祭は、その後、いろいろな面白いことに挑戦してきました。巨大な映画看板で街中を彩ったり、張りぼての象くらい大きなシネマ馬をロータリーに飾ったり、ぬいぐるみのシネマ馬をかぶって駅前でビラ配りをしたりしました。たわいないことだけれども、こうしたパフォーマンスが新百合ヶ丘の街をどれほど楽しくしてきたことか計り知れません。市民は面白いですね。楽しくやらないと仕事になってしまいます。僕は5年間実行委員長をしました。最後の年にベルリン映画祭でグランプリを受賞した台湾のツイ・ミリアン監督をお招きしたのですが、彼との出会いは忘れられない思い出です。彼は市民の手作り映画祭に感動してくれ、ベルリン映画祭よりも「しんゆり映画祭」の方が楽しかったと、市民スタッフ全員に絵を描いてプレゼントしてくれました。5年目の節目には大パーティを開き、勝利宣言をしました。私たちプロが勝利したのではなく、市民の皆さんが、自分たちでやっていけるぞと言う勝利宣言です。



ツイ・ミリアン監督を囲んで



市民映画祭の勝利宣言

1997年の春、視覚障害者の方から電話がかかってきました。「私たちも映画が見たい映画祭に参加したい」との申し込みでした。私たちはびっくりし、困惑しました。そこで直接お会いし話を聞くと、映画のアクションをト書きに直せば音声で聞けるといいます。<A子、顔を覆って泣く><B男、そっと彼女を抱く>そうした画面上のアクションを瞬時に読みあげFM電波で飛ばし、観客がイヤホンで聞いて画面を想像する方法です。これは、今日では全国に普及していますが、13年前は誰もやっていなかったもので、映画祭スタッフが半年がかりで完成させました。ただ、こうした脚本の書き換えはシナリオライターの著作権に触れるので、勝手に名作を使用する訳にはまいりません。使用料も莫大に掛かります。困った揚句、今村さんに頼み込んでカンヌグランプリを受賞した「うなぎ」を使わせて貰いました。このバリアフリー映画鑑賞法は、川崎から全国に拡がって行った誇るべき「しんゆり映画祭」の成果だと思っています。

「しんゆり映画祭」では、川崎が世界に誇れるジュニアワークショップをも2000年に開発しました。当時は新百合ヶ丘の街もビルが立ち並び繁華街になっていました。しかし、ショッピングは出来ても遊ぶ場所はありません。だから、地元の中学生は下北沢や原宿へ遊びに行ってしまう。新百合で遊べ

と言っても、何もないからつまらないというのです。新しい街だから文化的端子がないんですね。僕らの時代は貧しかったけれども、文化的端子はいっぱいあったわけです。ところが新百合にはない。そこで思いついたのが、中学生の目にこのまちがどう見えるか映画を作らせることでした。

早速、夏休み前に中学生を募集しました。しかし、映画作りは学校の延長ではないので、学校間の垣根を外し、年齢と男女別に班分けをしました。映画作りは共同作業なので、自然に生徒同士の新しい友情が生まれ交流が始まりました。スタートして既に10年、20本以上の作品が出来てソウルの映画祭などで大変評価されました。「しんゆり映画祭」が、何を志向してきたかがわかるので、メイキングを見ていただきます。

— 「ジュニアワークショップメイキング」上映 —

21世紀から始めた子供の映画づくりですが、ご覧になったように本格的な映画です。中学生に映画が出来るはずが無いと言われましたが、まあ、やってみようと思組みました。私たち映画学校の学生は20～40歳代ですので、教え方が全然違います。このメイキングを見て面白かったのは、映画の指導講師と中学生の女の子が論争する処ですね。

指導講師が、<先生が入ってきて来て、生徒がだらしないと叱るだろう>と叱り方を指導をしていると、女の子が<違うんだよ>と反論します。彼女は、<相手が新人教師だと、生徒の方が先生を馬鹿にする>というんですね。なるほど、ベテランの副校長と新米の女性教師では生徒達への威圧感が違う。つまり、指導しているプロの映画監督が、中学校の実態を生徒たちから学ぶわけ



ジュニアワークショップ風景

です。そのやりとりが面白かったですね。映画づくりといえ、子どもたちを無理に枠にはめてはダメなんです。彼らの発想や発見を尊重して大人側も一緒に考えてみる。それを繰り返して、丹念にドラマを組み上げていくことが指導する側にも求められたのです。10年間、そうして互いに努力を重ねて完成した作品が20本を越えました。これって、川崎市の宝だと思いますよ。「しんゆり映画祭」で私たちが蒔いた小さな種は、今、日本中に広がっています。最近はオーストラリアとも一緒にやっていますから、川崎で「世界こども映画祭」が出来たら面白いですね。

5 「映像のまち・かわさき推進フォーラム」の取組みについて

□映像のまち・かわさき

2年ほど前に阿部市長が『映像のまち・かわさき』を提唱されました。これには驚きましたね。“川崎には撮影所もないじゃないか？”東京の映画人から揶揄されたりしました。ま、それは間違いないが、“何もしないより何かした方が良いのだ”と私は答えました。実際、文化は非効率で儲からないものです。市長が旗を振らずして、誰が振るんだ。市長が旗を振ってくれば、少しは市民たちもやり易くなります。みんなで頑張れば、東京とは一味違った川崎映像文化が生まれてくる可能性もあります。

しかし、「かわさき映像のまち」の実態を問われると、実は私にもよく分かりません。映画制作に限って言えば、首都圏の撮影所は全て多摩川沿いの東京側にあり川崎には在りません。では、映画のロケ地まで拡大解釈したらどうでしょうか？しかし、近代的な高層ビルの街並みは東京に合わないし、歴史や文化遺産は京都の独壇場です。こうして考えると、川崎には明治百年の礎になった産業遺産しかないような気がしますね。それは先ほどお話したように、東京と横浜に囲まれた「産業のまち」だったから

です。

私が個人的に興味を惹かれるのは、刻々変化していく川崎市民の生活文化と地域資源としての多摩川です。多摩川を田園風景の上流から下って来ると広大な工業地帯が現れ、川崎は多摩川に沿って育まれた庶民のまちだと分りますね。山田太一さんの「岸辺のアルバム」に描かれたように、現代の日本人の生態の一端が見られる稀有な場所です。多摩川には東京の荒川や隅田川にはないロマンチックな雰囲気があるので、魅力的なロケ地だと思います。それから、映像のハード面での期待もあります。川崎には多くの大手IT企業があるので、ソフト制作のベンチャーを育成していけば面白いですね。

映像のまち・かわさきの取組の状況については、毎日映画コンクールを誘致した点は評価できるかと思いますが。また、日本映画学校と市民局が市内の中学や高校で映画ワークショップを試行しています。これは、10年たてば間違いなく文科省の正規な授業に取り込まれると思います。そういうことを川崎市は積極的にやってくれています。

毎日映画コンクールの表彰式や川崎大師にオープンした「映まちキネマハウス」、ロケ弁コンテストなどの取り組みも楽しみです。ロケ弁というのは、映画関係者に撮影現場で配られる弁当の事です。映画は貧乏だから予算が少なく、大体、貧しい弁当しかでないんです。私がテレビ映画をやっていたときに隣に東宝映画のスタッフがいて、全然おかずの量が違っていてコンプレックスを抱いたことがあります。スタッフが早く食べて、早く仕事に戻るのがロケ弁の目的です。他方、監督も俳優もスタッフも同じ弁当を食べる事でチームの一体感が生まれてきます。ロケ弁コンテストなんて誰が考えたのか、ユーモラスで面白い取り組みですね。「映像のまち」に力を入れている市長さんの努力に、われわれ映画の学校も応えなければなりません。まもなく、日本で最初の映画単科大学にもなるので、川崎の映像文化に貢献できると確信しています。

私としては、自分なりに「映像のまち・かわさき」の一端を担おうと具体的な映画作りを始めています。今年は、中越地震で全村崩壊した山古志村の復興を記録した「1000年の山古志」と、被虐待児の施設にカメラが入った「葦牙ーあしかび」という2本の映画を完成し全国で上映しています。「1000年の山古志」は全国上映に先駆けて、川崎で特別ロードショーを開催しました。「葦牙」も川崎の各地区で上映をしてゆく予定です。「葦牙」は虐待を描いた映画ではありません。施設に保護された子供たちが、はじめて自分の未来を語る映画です。画期的な感動的な映画ですので、皆さんぜひ機会があったら見てください。今、2日半に一人、親によって子どもが殺されています。我々の時代には想像も出来なかった恐ろしい事が起きているのです。

私たちは人間の絆を作っていく映画を作っています。次の時代のページをめくったときに、何か人々の手がかりになるものが必要です。皆が転ばないように、電車のつり革の役目を果たす映画を残そうと試んでいます。われわれの映画の素材は、長い歴史時間に耐えて生き残ってきた日本人の叡智や価値観です。普遍性のある生活文化です。そうした貴重な文化は都市社会では消滅したが、地方にはかろうじて残っているのです。例えば、親孝行などという言葉が地方には残っています。山間地では、親と子が協力しないと何もできないわけです。慎ましく生きる・・・人間の本質を示す崇高な価値観も日常に生きています。一度、我々の作った映画を見てください。

過疎だとか限界集落だとか言われますが、地方は都市より豊かな文化を持っています。村の人がしゃべる言葉は生活哲学です。大学教授なんて、到底かないません。書き留めたくなるような素晴らしい言葉がポンポン出てきます。「障害というのは、天が与えてくれた贈り物だと思わなきゃね」などと、旅

館のおばあさんが言うんです。われわれの都市社会では発想だにできなかった言葉が、地方の地域社会には生き残っているのです。

私たちの映画は、田舎ばかり撮っていると思われるかも知れないが、決して、そうではありません。そうではなくて、2000年の歴史の中で生き残ってきたものを川崎の映画人が掘り起こし、川崎から全国、世界に発信する映画づくりを担っているのです。

私は映画人ですから、私が「映像のまち・かわさき」に貢献出来るのはそんなところですよ。

□映像のまち・かわさきが目指すべきもの

川崎市を、阿部市長さんが考えるような素晴らしい映像のまちにするためには、「才能育成の場」「制作の場」「観せる場」「販売する場」の場作りが必要だと思います。これらの課題を克服するために、産学協同の前にまず学学協同をして、若い人たちがもう少し横につながり、自分たちの才能を磨く努力をしないとダメです。川崎市には映画学校があり、音楽学校があり、美術デザインの学校があり、ガラス工芸の学校があります。芸術系だけでなく、福祉や経済や農業や技術系の学校を含めた大きな学学協同の環状線状の教育システムを市内に構築していくことが必要ですよ。

コンテンツ開発や制作には資金が必要になりますから、この段階で産学協同や興行、例えばチネチッタなどと作る側とのコラボレーションが必要になります。とくに、ソフト系が難しいわけですよ。ソフト系のIT企業やベンチャー企業は横浜市の方が圧倒的に多く、何十億、何百億の規模でコンテンツの開発や生産をしています。川崎にもそういうものがベンチャーから育ってくるといいですね。

コンテンツの難しさは人間の頭脳から生み出されるもので、工場で大量に開発できるものではありません。コンテンツのベースには、その国の固有の文化があります。韓国は700億円をかけて、韓流を育てました。韓国映画はアジアを圧倒したが、しかし、出来なかったこともあります。それはアニメーションです。中国にもアニメの会社が200社もできたそうです。でも、中国のアニメは成功しなかった。それは文化の層の問題です。日本には鳥獣戯画とか、江戸時代の浮世絵とか、連綿と続く漫画文化の積み重ねがありました。膨大な時間ですよ。「アジアのアニメは、10年は日本に追いつけない。それは、子どもの頃から染み付いて磨かれてきた、漫画文化があるからだ」。これは佐藤忠男さんの意見ですが、文化の壁とはすごいものですね。

これからわれわれが映画や映像をやっていく中で、あるいはコンテンツを開発していく中で、一番大切なのは深い教養や広範な知識です。よく若い人は自分のセンスとか感性を云々しますが、そんなものは、全部嘘です。35年間、私はそういう若者と付き合ってきましたが、磨かないと単なる石ころなんです。磨きあう環境が必要です。それからチャンスを活かしてやる環境も必要です。若い人たちに希望とチャンスを与える。韓国、中国、オーストラリア、いま世界中が国を挙げて取り組み始めています。

文化の環境づくりはどうしたら出来るのか？なかなか難しい問題ですよ。今村さんは、面白い学校を創るために、好奇心を喚起しながら触発していくシステムを提唱しました。じゃあ、川崎の環境は誰が作るのでしょうか。行政が作るのか？或いは、日本映画学校が作るのか？そうではないでしょう。やはり、住民が自分たちの住む街を魅力的に磨いていく意欲を持たないと駄目ですね。次代の子供たちへ手渡す、文化の街づくりですよ。

コンテンツ産業なんてすぐできるというのは大間違いですよ。努力しながら、じっくり時間をかけて、皆で新しい文化的な環境を作っていくことしかありません。

先刻のジュニアワークショップ・メイキングの最後のタイトルを覚えていますか？

“へたくそでもいい。このまちで夢見よう…” どうやら、本日の結論がでたようですね。

映画も演劇も音楽も下手かも知れないけれど、子どもたちが、自分が生まれ育ったこのまちで夢を見て、それを実現していく…。われわれ大人が、それを如何にサポートしてゆけるか、それが一番大事ではないかと思えます。

長い時間ご清聴頂き、ありがとうございました。

【質疑】

客席 先ほど中学生が映画づくりをしていてびっくりしました。中学生が何に興味を持って映画を作っているのか不思議なんです。うれしいことなんですが、中学生が映画作りに興味などないかと思いましたが、秘訣はあるんですか。

武重 秘訣って、僕らに秘訣があるわけではなく、むしろ、子供たちの中に潜む好奇心に鍵が在るのだと思います。指導講師たちは、集まった子供たちに、今、彼らが何に関心を持っているか自由に書かせます。次に、全員が自分の書いたものを読みあげます。子供たちは他者の関心事に興味を持ちます。この自分と他者との違いが子供たちの好奇心を刺激するのです。学校の授業では正解はひとつだが、映画の脚本には正解というものがない・・・学校外の未知の世界との遭遇です。

自分たちで選んだ関心事の物語を脚本にしますが、脚本に登場する人物は大人であり子供であり多様です。彼等は他者を客観的に眺め、デッサンすることに興味を持つようになります。更に撮影になると、自分たちのイメージが具象化され、物語が生命を持って動き始めるので、彼らの好奇心はピークに達します。

では、彼らの中に生まれ膨れ上がっていく好奇心の源は何かといえ、それは自分で発見した喜びなのです。映画撮影は毎日が初めての体験であり、発見の旅だから子供たちは夢中になって、のめりこんでいくのです。

もし、われわれ指導側に秘訣があるとすれば、彼らの発見のプロセスを陰から支えている事ぐらいでしょうか。